



TITLE:

人文 第11号

AUTHOR(S):

---

CITATION:

人文 第11号. 人文 1974, 11: 1-36

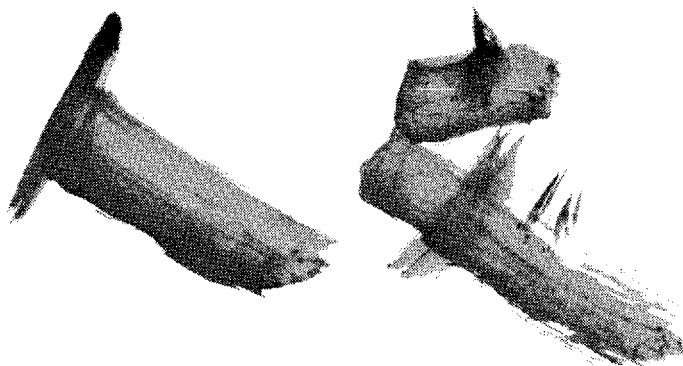
ISSUE DATE:

1974-12-25

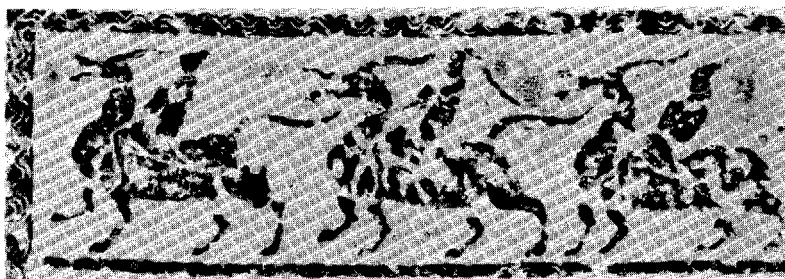
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57137>

RIGHT:

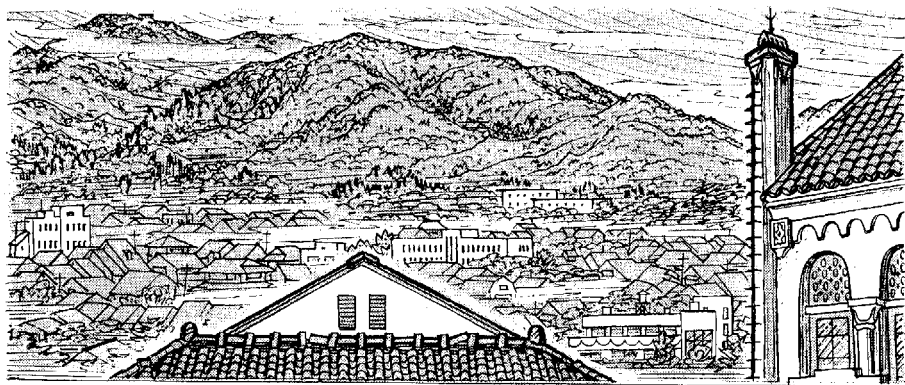


第 一 一 号



1 9 7 4

京都大学人文科学研究所



# 人 文 第一号 1974年3月—8月

## も く じ

### わたしの考え

気にするときりがないが——校正をめぐって……………渡部 徹…2

### 講演

夏季講座

都市・物・人……………吉田 光邦…4

オアシスの都市国家・敦煌……………藤枝 晃…

唐代科挙制度よりみた地方と中央の關係……………愛宕 元…

西地中海の都市……………榊山 紘一…

イタリヤ中部山村の生活と意識……………谷 泰…

柳田国男『都市と農村』をめぐって……………飯沼 二郎…

### 書評

川勝義雄『魏晉南北朝』(古屋)／林屋辰三郎『近世伝統文化論』

(吉川)／河野健一『現代の認識——論壇時評——』(森)／竹内実

『茶館——中國の風土と世界像——』(秋山)／梁啓超著 小野和子

訳『清代學術概論』(山下)／衣川強編『宋元学案・宋元学案補

遺・人名字号別名索引』(梅原)

### 共同研究のうごき

「昭和初期」ではなく(副島)／訳注づくり(永田)／出發(野

村)

### 研究ノート

歴史家ヴェントウリ教授を迎えて……………松田 清…20

コムボジション……………横山 俊夫…

五代北宋の山水画……………曾布川 寛…

### 旅

ジャイ・ヒン・サブ……………横山 俊夫…24

イタリヤの二週間……………谷 泰…

韓国古建築瞥見の旅……………田中 淡…

### 書いたもの一覽(一九七四年三月—八月)

東洋学文献センター漢籍担当者講習会(23) お客さま(29)

この一年間に感銘をうけた本(29) 人のうごき(35)

カット・田中重雄

## わたしの考え

# 気にするときりがないが

——校正をめぐって——

渡 部 徹

出版委員や所報委員からも一度も問題提起されていなくらいだから大したことではないのだろう。だが私は校正のたびに厄介なことだ、何とかならないものだろうか、悩まされるのは、当用漢字、現代かなづかい、送りがない、である。気にしだすと神経衰弱になりかねない。

ところろに、この『人文』の前号（第一〇号）をみても、「了えて」、「短かい」、「誰れが」、「変りばえ」、「極めて」、「尖兵」、「起す」、「少い」、「出直おす」、「平行」、「汚ならしい」、「絳った」、「相い次いだ」、「費す」、「扱かう」、「新らしい」、「生れかわる」、「要りそう」等は、私が校正にあたれば、気になり、勝手に直してしまうだろう。もちろん多くの筆者の文章だから、各人の好みは認めるべきだとの議論もなりたつ。しかし同じ筆者の一つの文章の中で、「費す」、「尽くす」、「扱かう」となったり、「新らしい」、「生れ」と使われ、「取り入れる」、「起す」、「手続き」、「度合」とでてくると気になる。

こんなことを私がとくに気にしたのは、『堺市史』続編第二巻・第



三巻を編輯し、校正したときからであった。同書は、三、四人で執筆したものであるが、本の性質上、よみ物としての統一が要求された。最初の第二巻では市史編さん室で、用語例の基準を作成し、それに合わせることでやったが、例が多ければ、一々参照が面倒だし、少なければ、例にないものが続出する。そこで『広辞苑』でやってみようとしたが、この辞引は、送りがなが多く省略されている。たとえば「うごき」は「動」である。結局、第二巻は校正のでた都度のその場当りにならざるをえなかった。

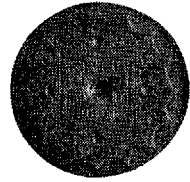
これではというので、第三巻では、何か座右に基準になるものをと、いろいろ辞引をさがし、結局、広田栄太郎編『新編用字用語辞典』の用例で統一することとし、各筆者にこの辞引を渡して校正してもらい、最後に私が校正した。それでも千ページをこすだけに、統一ができたといえる自信はない。たとえば、この辞引では「行なう」であるが、新聞・雑誌は大部分「行う」となっており、「行なう」とするのが、気分的になじまないということがあるから。

だからといってどうすればよいという案があるわけではない。いまでも、特定研究の成果、『産業構造と社会変動』の校正をみているが、論文集だから、同一論文ごとに統一するというくらいですますほかはないと思っている。じっさい、自分自身、書くときどきで、送りがながちがうのだから始末がつかない。

しかし、現状のままでよいというものでもなからう。もの書きの大先生のそろっているわが研究所あたりで、名案を出してもらいたいものである。



## 講演



夏期講座（昭和四九年度）

八月一日—三日  
於 本館ロビー

### 都市・物・人

吉田 光 邦

「現代の都市に住むことは悪夢のなかに住むことである」と現代都市の改造プランを世界的に推進するトキジマデスという。現代の都市は、地球の規模の人口の増大、経済成長の高度化によって大きく変質している。加えて自動車という人間とは異質の存在が、都市空間に大きな位置をしめはじめている。そのために現代都市空間は、人間のサイズをこえた自動車あるいは

航空機といったサイズに適應する空間として質的な変換を上げてしまった。

そこにわたしたどもは現代都市と歴史的都市との大きな差異をみることが出来る。初期の都市は人間のために成立した。プラトン以来あるいはトマス・モア以来のユートピア像は、秩序正しい中性的人間の組織として都市をとらえる。また中国の古典や史書にみえる理想都市は、天子を最高とするヒエラルキの表現体としてデザインされた。

こうした人間のために設計された都市が、物と人間の共存系としてデザインされはじめたのはいつか。ヨーロッパの連綿たるユートピア構想の歴史は、みごとにそれを反映する。ペーコンの新アトランティスもその一例であるし、のちに現われたフリーエ、オーエンなどの人びとの工業都市と田園都市の組み合わせも、またその試みのひとつである。

とはいえ現実の都市の未来像は、きわめてペシシスティックな方向しかない。第一にデザイナーの決定的不足であり、第二は増大する建築量のカーブの爆発的な上昇である。そうしたなかにあって、人と物、人間と機械が最も濃密に共存している現代都市なるものは、せめてその共存体系の確立と整理のなかに、わずかな活路が見いだされるにとどまろう。

## オアシスの都市国家・敦煌

藤 枝 晃

紀元前一〇〇年頃に敦煌の町が建設せられ、一四世紀に明朝が西北辺境を抑棄するまでの千数百年の歴史の中で、敦煌の町は中国の中央政權の支配下において、西域への門戸として機能していた時期と、中国の支配から分離して、敦煌オアシスのみ、ないしは周辺地域

を含んで一つの政權を立てていた時期とあって、両者はほぼ相半ばする。後者のもっとも典型的なのは九世紀半ばから十一世紀の半ばまでの帰義軍節度使時代である。東トルキスタンのトルファン盆地に五―六世紀に国を立てていた高昌国と肩を並べる漢人のオアシス国であった。

このオアシス国の(一)経済基盤はまず農業であり、(二)国家の富は中継貿易に依るものであり、(三)その上に高度の仏教文化がひらけ、(四)そして何よりも、中央アジアの異民族に囲まれた中に漢人が漢文化を保っていたことで際立つ。

(一) オアシス農業 南側の高い山から流れてくる水を高度の技術によって水路をオアシスに引く。中国から分離すると、中国の貨幣は流通せず、取引は原則として穀物で以て行なわれる。

(二) 貿易 支配者による官営貿易で、于闐や甘州回鶻などの諸国と連合キャラバンを組んで中国と朝貢形式の貿易を絶えることなく営んでいた。敦煌には中国への輸出品となり得る物産がなく、于闐の玉や波斯の織物、北方草原の馬など、他国の品を輸出する中継貿易であった。敦煌の王はそれらの国々の王と婚姻によって結びつきを固めていた。

(三) 仏教 オアシス内に一六ないし一九の大寺があり、三つの千仏洞が開鑿されていた。僧尼の数は常時一千人ばかりいた模様であるが、これは全人口に比して驚異的な割合になる様である。戸籍に見られる出家者の記載も、その割合が多かったことを示す。

(四) 中国文化 異民族に取囲まれて、陸の孤島ともいふべき漢人国家が二百年も本土から切離されていると、かれらの伝える中国文化は本土のそれからかなりずれたものになっていた。敦煌写本中に見出される暦日や文書の日付を見ると、外見は中国風であっても、その五割以上は朔閏の置き方がずれている。この時に毛筆の使われることは絶無にちかく、木筆で以て異様

な漢字を書いていた。この外見上の異様さが内面における「ズレ」をある程度示すものと言えそうである。

## 唐代科挙制度よりみた

### 地方と中央の関係

愛 宕 元

近代国家成立以前においてすでに二千年にわたって存続してきた中国の官僚制をM・ウェーバーは「家産的官僚制」と定義して近代ヨーロッパのそれと峻別したことはあまりにも有名であるが、その定義はともかくとして、中国社会の支配構造として官僚制は常に特徴的に見い出されることは事実である。この中国官僚制は隋唐期にその様相が大きく改まる。すなわち中央三省六部の官僚はいわずもがな、地方行政の末端である県官までもが中央政府によって任命派遣されることになった。従って中央政府は恒常的に大量の官僚予備軍を確保することが必要で、そのために官僚有資格者を選抜する官吏登用試験、すなわち科挙が設けられた

のである。唐代には科挙受験資格に二方法があり、一は都の国立大学の学生、他の一は地方での試験を通して地方長官から中央に推薦されてくる郷貢と称せられるものであった。前者はほとんどが高級官僚の子弟によって占められたため、官界入りして富と名声を得ようとする地方の有能の士はおのずから郷貢ルートによらざるを得なかった。かつ前者の出身者からは蔑視される郷貢ルートの受験者は全体の八割以上を占め、ほぼ毎年実施された科挙のたびに千人以上もの落第者を再生産したのである。この地方からの受験者、すなわち郷貢ルートによって落第したものを郷貢進士、郷貢明経などという。唐代中頃から後、半独立的様相を呈する節度使政權が割拠し、その支配を強化するために中央政府のそれを模した官僚群を整備するようになる。官僚化への強烈な志向を有しながら中央政府から疎外された科挙落第者の多くは、節度使政權の擬似官僚群に吸収されてゆく。正規の官僚化を拒否され、なおかつその願望を捨て切れない失意のこれら知識人を受け入れる素地が広範に形成されつつあったのが、唐代後半という時代であった。史上、科挙に落第して官僚化の望みを果し得ず、反体制的行動に走った不平インテリ分子は少なくない。唐末の黄巢や清代太平天国の指導者洪秀全などはその最たる例としてもっぱら言



われるところであるが、唐代後半以降における科挙落第者の節度使政權への積極的参加は、彼等の官僚化志向にある程度満足させる代替物であり、そこには反体制的意図は認められない。にもかかわらず、結果的には節度使政權を強化し、唐朝の没落を促進して遂には滅亡に導びくことになったという事実には、歴史の皮肉を見ることができであろう。

## 西地中海の都市

樺山紘一

西欧都市については、確固たるイメージがある。大洋中の孤島のように、農村から割拠された都市。近代の合理主義を体現したかのように構成された、非農村的人間集団としての都市。

ところが、現在ですら印象的であるが、この西欧型都市は、地中海にむけて南下するにしがたってしだいに姿をかえ、イタリア、イベリア、そして北アフリカのマグレブ地方にいたると、まったくことになった都市が、あらわれる。西地中海の都市には、それ独自の質

があるようである。

たとえば、家屋建築における廻廊、中庭、バルコニー、そして袋小路ばかりのせまい道。これらは北方のヨーロッパにはなく、いっぽう、地中海の東へ、西アジア一帯にまでひろがった特色なのである。また、たとえば、都市と農村との境界のあいまいさ。これまた、北方ヨーロッパにはかんがえられない。西地中海の往古よりの、特性である。

イベリア半島を例にとってみれば、あきらかなことだが、この特質は、自然風土条件もさることながら、数千年来の歴史的転変が、かかわって大きい。ローマ帝国下における都市と農村の関係、イスラム教アラブ人の侵入によるオアシスの集落の導入、そして、ヨーロッパ人の再征服運動の結果うまれた、大所領政策。こうした時代的にことなる複層が積みかさなって、特異な世界をつくりだしている。

まず、都市は、農村から隔絶されていないことである。農民はしばしば、都市に居住し、土地所有者はもちろん、農地に土着するよりは、都市にすむことをえらぶ。かくして、北欧的な散居農家というものはまれとなり、そして、そもそも、都市と農村の人的な対抗関係などというものは、ありえないことになる。

つきには、都市の内的構造じたいが、農村的（ある

いは、西アジア・オアシス農村的）であることだ。土地から剝離されたおびただしい数の農業労働者が、都市に流入し、またはほとんど「都市」といつてもよい大村落を形成し、都市的ということで想起される合理的な平面構成、人的関係を、つきくずしてしまうのである。

このように、西地中海、ことにイベリアから、マグレブにかけて、都市は、その内的構造においても、また外的構造においても、農村とは、おおきく距たることのない社会となる。それは、北方のヨーロッパとは、あまりに顕著にことなる特質である、といわねばならない。

## イタリア中部山村の

### 生活と意識

谷 泰

都市の文化と農村の文化、こういう都市と農村との対立的な対比の視角が、どの地域でも意味をもつとは

かぎらない。日本やアルプス以北の西ヨーロッパはともかく、地中海文化圏では、事はそう簡単ではない。イタリアの地方を車で走っていて、いかにも都会風の密集集落をみかけて、町にでもやってきたかと思っていってみると、なんと農民が大部分の、人口数百の農村であった、というようなことは、けっして珍しいことではない。この地域の農村は、城壁に囲まれたものさえあって、密集度の高い集村形態をもつのが一般だ。いやこれは、乾燥地域一般の特徴といえる。しかもイタリア都市のシンボルともされているピアッツァ（広場）が、このムラの真中にあつて、田舎紳士がむらがつて、都市的雰囲気を漂わせている。村法をみても、共同体的住民団体を *universitas civium* などと表現しているのにでくわすと、いったい都市的 (*civic*) ということばの意味を、この地域ではなんと解しているのがわからなくなってしまう。われわれが考えるような日本的、あるいは西欧的感覚で提出された都市の文化と農村の文化というダイコトミーを、この地域にもちこむのは適切ではない。

ところで、農村の文化というのを田舎、つまりルーラルな地域のそれと解することにしても、この地域には、農的生活様式のほかに、牧的生活様式がある。よく農牧 (*agricopastoral*) と単純に両者を結びつける

が、各々の技術体系、生活様式は大いに異なる。もちろん牧といっても、この地域では季節的に山地と平地とを往復する移牧の形式をもった牧が一般的であった。わたしは一九六九年からイタリア中部山地にある、移牧村において調査を行ってきた。その調査の結果をも含めて考えるとき、農村の生活様式と異なる次のような点が、牧村の特徴として注意されねばならないと思われる。ここでは、男性成員である牧夫は、冬期には村を離れて平地に降り、夏期には村の上の山の放牧地にとどまる。そのため性的分業はもちろん、性的に居住の分離がみられ、農民家族とはかなり異った家族関係が一般となる。また農民が地主の下で恒常的な経済的従属下にあるのに対して、牧民は、牧畜経営者や放牧地所有の地主と、年ごとの自由な契約関係をもってかわるにすぎない。ある意味で、これらの性格は、商人的でさえあり、貧しいながら独立的なかれらが、農民に対してもつ蔑視と誇りの意識を感じとることができるのである。もちろん、商人的性格に通ずる面があるからといって、その文化において全てが同じではない。移牧民にはそれなりの固有の特徴も少くはない。牧的生活者は、その移動性、そして支配からの相対的独立性のゆえに、歴史の資料に、その生活の痕跡を多く残していない。しかしイタリアを含め地中海文化圏

では、移動性という特徴は無視できない要素であるだけに、牧的生活様式の意味を明らかにしておく必要がある。

地中海文化圏における都市的、農的、牧的生活様式のからみあいには、アルプス以北からの類推では正しくはとらえられまい。新たなスキームをもって考察する必要があるだろう。

## 柳田国男『都市と農村』を

めぐって

飯沼二郎

私は、この講演に「日本ファシズムの前後」という副題をつけておいたが、あまり長いので削られてしまった。この副題で、だいたい、なにをいおうとしているのか、わかっていただけるとおもったのだが。

一九三〇年から始まる経済恐慌、ついで一九三一年九月の「満州事変」は、大正デモクラシーと日本ファシズムとの転換点をなす。ちょうどその直前、一九二

八年一〇月から一九二九年七月にかけて、『朝日常識講座』全一〇巻が出版される。その著者はすべて東京朝日の社員（編集局長、経済部長、社会部長、調査部長など）か、東京朝日に深い関係をもつもの（編集顧問など）で、つまり、当時の東朝の意見を代表するものといえる。その意見は、ひとことでいえば大正デモクラシーである。それが、朝日の「常識」だったわけである。柳田の『都市と農村』もまた、その一環として執筆され、出版されたものである。

もともと柳田は東大の法学部を出て、農林官僚として生涯を出発する。すでに明治末年に『時代と農政』という著書があり、はっきりと地主制を批判している。それは地主制批判の先駆的なものであり、やがて、柳田は官僚としての途を、みずから閉ざす。『都市と農村』は、この著書の延長線上にあり、はっきりと地主制を批判し、自作農主義をうちだしている。そして、この考え方は、大正中頃らしい、「進歩的」な農林官僚の基本路線でもあり、当時は地主の圧力によって法律化できないが、敗戦後、占領軍の政策とあいまって、農地改革として実現する。

世界経済恐慌は、農村にとくに烈しい打撃を与えた。それは、まず、アメリカを主要な市場とする繭価の暴落としてあらわれ（一九三〇年の春繭相場は、前年の

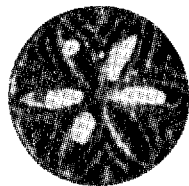
四七％）、これをかわきりとして米価その他の暴落がつづく。工業製品の価格は一九三一年五月を最低点として上向きに転じるが、農産物価格がようやく上向きに転じるのは一九三五年以後である。一九三二年の五・一五事件を契機として、農村とくに東北農村の困窮がクローズアップされ、同年六月および八月に、時局匡救議会および救農議会がもたれる。しかし、そこで決まった最も主要なことは、けっきょく、金のかからない農山漁村自力更生運動であり、その中心は産業組合拡充計画であった。その企図するところは、タガのゆるんできた地主制にたいし、国家権力が直接、農民を掌握することによって、再び農村に新たなタガをはめようとしたのであった。このような体制のなかで農村はファシズムの基盤となっていく。

柳田自身についていえば、以後、彼はもはや地主制批判や時局批判を表向きはせず、ファシズムに迎合はしないが、農民の伝統的な精神構造の中に埋没していく。

# 書評

## 川勝義雄『魏晉南北朝』

(B6判、中国の歴史、三巻、四一〇頁、講談社)



この四百年にわたる乱世を川勝さんは「輝やかなしい暗黒時代」と呼ばれている。中国文明が乱世のなかでもとだえることなく、かえってその文明圏を拡大し、その内容を豊かにした時代を捉えられているからである。そしてこの「中国文明の強靱性」を支えているのが、「知識人たちの強靱性」であり、自立的農民の共同体―郷村社会がこの知識人たちの基盤になっているとされる。北方異民族の侵入におわれた漢民族は、江南にむかってのがれ、未開の江南は急速に開発されてゆく、そしてこの経済発展の上に、漢代知識人の伝統をうけついで貴族社会が形成され、江南地方は経済力でも文

化水準でも華北をしのぐに至る。一方、華北を支配した異民族も、江南の文化をうけ入れることなしには、漢族社会を含んだ安定した支配体制をつくり出すことができない。――中国史に全くの素人である私には、この時代の大筋をこの程度にしかつかむことができなかったが、次々とおこる王朝のそれぞれに異った政治体制の問題には興味をひかれた。貴族制、宗室的軍事封建制、府兵制等々の敘述を読みながら、中国における政治体制安定の条件が、郷村社会との結びつきをどのような形で確保するかという点にかかっていたということを変更して認識させられ、同時に漢代がつくりあげた伝

統の強さに改めておどろかされた、それは儒教の強さということにもなるのであろう。川勝さんのいわゆる「知識人の強靱性」とは、儒教を媒介とした郷村社会との交流の場をつくり得なかつた権力は、安定した政治体制を生み出すことができないという事態のなかにみられるのであり、それは儒教の強さということにもいいかえられるように思われるのである。

漢代において、すでに郷村のなかに儒教的観点からエリートを評定する郷論が存在し、それを基盤とした官吏推薦制―「郷挙里選」制が成立する。そしてさらに隋唐帝国においては、南北朝時代の家格を基礎とした貴族制が打破されて、今度は、郷論の推薦ではなく、個人が志願する科挙制ができあがる。儒教はいわば、権力と郷村からさらに権力と個人とを交流させる場をつくり出していったというのであろう。

現在の中国の孔子批判についても私はさしたる知識はないが、川勝さんのいえば、革命中国もまた「中国文明の強靱性」と苦闘しているということにもなるうか。

(古屋哲夫)

## 林屋辰三郎『近世伝統文化論』

(A5判、三三三頁、創元社)

満六十歳を記念されての自選論集である。心からお祝い申しあげたい。

「日本の文化はいつも、遠く先例をたずね、重ねて新儀をひらく」といって創造性があったのである」と書かれた一文があるように、本書のテーマは日本文化における伝統と創造の問題であろう。だがそれよりもなによりも、私が本書のはしはしからつよく感じとったのは、それぞれの題材をまことに手なれた手法で料理しながら楽しんでおられる、というよりは玩んでおられるといったほうがふさわしい、そのような

学匠のユトリであった。東福門院木像に接することを目的に訪れた光雲寺で、思ひもかけない宗達筆の杉戸絵を発見される。勢いこんだところはすこしもないが、その喜びは読むものにはのびのびと伝わってくる。

また「人間宗旦」の一篇は、「元伯宗旦文書」を手にしたよろこびのあまり、千宗旦周辺の断片史料をあつめて書かれたもの

だという。それを、一種の遊びである、とさりげなくいっておられる。学問にはなにがしか遊びが必要だとおもいながら、あくせく生きなければならぬ後進の私には、このユトリは羨ましい。

ユトリはまた柔軟な思考をあちこちに点在させることにもなっている。芸術としての茶と茶の生産者の結合を論ぜられるのは、いわれてみればあたりまえのことなのだが、それだけにかえて歴史家のたしかな眼が感ぜられるし、家元制を論じて、封建制とともに近代的な契約関係に基礎をおく資本制が難居しているといわれてみると、なるほどそんなものかとうなづかせられるから

不思議である。

私をもっとも興味おかく読んだのは、光悦にかんする諸篇だった。読んだばかりの花田清輝「本阿弥系図」とあれこれ思いくらべて楽しませていただいたのだが、そこには、光悦ならびに光悦をとりまく京都町衆にたいする著者の時代をこえたつよい共感が見とめられる。すこし読みづらかったのは、「藩—発想と実態—」である。藩—垣の概念についての日本は求心的、中国は遠心的の議論はなじみにくい。また坂本竜馬の藩論に、藩のあたらしい生き方を示した側面にあわせて藩がなお大名の「家」と考えられていた側面を指摘されているが、この結論が「東家西藩」という、藩を家と並置した表現から導かれているのだとすれば、これもいかがであろう。私が読みづらいくと感じたのは、他の諸篇にくらべてすこし意気どみがめだつたためであろうか。(吉川忠夫)

## 河野健二『現代の認識——論壇時評——』

(B6判、二七三頁、朝日新聞社)

府宮小栗栖団地という、二ナ川、革新

府政のモデル団地に間借りさせてもらって

から、かれこれ一年半になる。『革新』政治のきめ細かな配慮がいきとどいていて、バスも通わぬ空気のきれいな土地に住む人々は、毎日駅まで二十分以上テクテク歩いて、健康増進をはかる権利を享受している。かような僻地では、朝日などという高級新聞は、わざわざ勧誘に来てくれないので、よほど知的欲求のつよい人でないかぎり、手ぬぐいなんかの景品をもって、勧誘に向いてくれる毎日などの情熱にほだされてしまうのである。

したがって、日本の代表的ブル新に掲載された河野氏の「論壇時評」も、うかつにもほくの目に触れなかったものが多く、いまこのように一冊の本にまとめてもらったことは、大いにありがたいことである（もっとも、著者自身は、本にすることにどういう意味があるのか、いく度となく自問された模様であるが）。さて、これを手にとって、朝日夕刊の文化欄がいかに知的水準の高いものであるかを再発見し、手ぬぐいやチリ紙に幻惑されてはますます知的程度が低くなると気がついて、毎日を断わるうかと思っている次第である。ここ数年來（といえば、聞えはいいが、それ以前も

大同小異）、総合雑誌さえまともに読んでいないばかりは、まず素材の吟味ができないという点で、この論壇時評を評する資格に欠けるが、大雑把にうけた印象からいえば、著者は雑誌論文の紹介に終ることを潔しとせず、社会科学者でありかつ大学人であるという立場から、それらの意義づけと方向づけを試みているのである。それは、「問題に接近して、それをしさいに観察する目」と、「問題から距離をとって広い視野を求める目」とをあわせもつ複眼で、現代の社会を理論的かつ歴史的に把握しようとする社会科学者の真摯な努力の現われであるといえる。書名を『現代の認識』とした所以である。その認識の確かさは、例えば「中国を旅して」という一節で、林彪事件以後の状況を、「脱文革化」の達成、「周恩来路線」の確立と把える見解に疑問を提し、

△プロ文革の基本路線が確実に継承され、それが根づいた結果だと「認識」している点などからも、十分窺えよう。ところで、その確かさは、あくまで認識の確かさである。著者が何よりも「知的水準の高さ」を追求してやまず、「イデオロギーと客観性の矛盾」を意識しながらも、まず客観性を重んずるのも、この社会科学者の立場からである。そして、その立場からみれば、あの大学闘争が、「認識の世界に新たな要素を持ちこみ、それまでの常識を打ち破った」として映るのは当然で、「知的達成」という点で私たちはなお見るべき獲得物を多くもっていない」という不満が吐露されるのである。暴力を以て知性をかなぐりすてた大学に、知的達成などというものが、なおありうるとすれば、大いに慶賀すべきであろう。（森 時彦）

### 竹内実『茶館——中国の風土と世界像——』

（13×19判、二一〇頁、大修館書店）

を書かなければならないんだ。

Y X  
『茶館』読んだ？  
いや、それどころか『人文』に書評

X 僕は地理屋のはしくれだから読んで

いてうれしくなった。茶のみ話というけれど、いずれ天下國家を論ずる体のものかと思っていたら、話は中国の「八広さ」に始まり、またそれに終るのだから。こんなふう  
に中国の土地に目を向けた「地理の本」は  
みたことがない。最近、北京の外文出版社  
から出た『中国の地理概況』なども、いろ  
いろと地理的なことがらを羅列してはいる  
けれど、全体としてはこちらの方がはるかに  
地理的だ。その土地（の景観）を全体として、  
一つのまとまりとしてとらえるとい  
うのは、地理学の一つの目的のはずだけれ  
ど、そういう「中国地理」は著者のいうよ  
うにまだでないのかもしれないね。

Y 中国の地域区分なんかについては今  
までも地理学者がいろいろとやっている  
し、……それから「郷」についての話、あ  
れは「生活空間論」や「基礎地域論」を思  
い出させるね。

X いやそういうふうに、従来からの定  
説や専門用語をだして、それで全部を押え  
こめるというような考え方をやめてもう一  
度何でも洗いなおしてみようというのが  
『茶館』の方針だろう。クレッシシーやパッ  
クの地域区分だけではなく、シューマイと

ギョーザの違い、福沢諭吉や毛沢東の分割  
法なんかをもってくるのも、僕なんかには  
いろいろなヒントになると思う。「郷」と  
いう堅い殻を持った世界も、歴史の流れに  
のせてダイナミックに伸縮するものだとい  
うのは、歴史の中でむしろ動かないものと  
して地域の枠を考えようという地理屋の発  
想と反対になる。

Y そこに歴史、地理があるんだろうね。  
X 歴史は単なる時間の経過ではないし、  
地面を切り裂いたものが地域でもない。そ  
して時間とか空間とか切り離さないで、あ  
るとき、あるところにあるものを考える。

### 梁啓超著 小野和子訳 『清代學術概論』

（新書判、三六二頁、東洋文庫二四五、平凡社）

そこではじめて風土とか世界像がでてくる  
し、歴史とか地理とかいうなわばりもなく  
なる。

Y そのことはまたにしよう。でも中国  
という一つの大きな世界をわかるのには、  
本当に一步づつ南から北へ歩いていかなければ、  
という感じがあるね。何でもいかに  
ら大地を歩いていて目に触れたものから  
はじめてゆく。キャンピングカーに茶館を  
のせて出発したいね。

X いやどうもありがとう。いまのよう  
なことを書いてみるよ。（秋山元秀）

梁啓超のこの書は、清初の学者黄宗羲の  
『明儒學案』に始まる「學術史」の伝統を  
継いだものである。本書はその対象を清代  
に置いている点で「清代學術史」ともい  
べきものであるが、著者はへり下って「清  
代學術概論」と名づけた。確かにこの書は  
明儒學案や宋元學案のように完備したもの

とはいえぬが、そのかわり、清代の學術を  
ヨーロッパのルネッサンスになぞらえて論  
述したり、自らを清代學術史の主要人物の  
一人として登場させ、その評価をおこな  
たり、清代知識者層の生態を鮮やかにえが  
き出したりしている点で、きわめて興味深  
い読物といえる。この本が Intellectual



Trends in the Ching Period というタイトルで英訳され好評を博したのも、ヨーロッパ的思考に馴れた評者として十分うなづけるものがある。

さて本書の内容はそれくらいにして、翻訳の方に移ろう。評者は翻訳には昔から二種類あると考えている。例をプラトンの翻訳にとろう。先ず、かの有名なジョウエツトの訳であるが、これはギリシア語とつきあわせてみると、大胆な意訳があり、解読の難しいところなどはばつさりと脱落させたりしている。しかし訳文は英語になりきったきわめて流暢なものである。もう一つはシュライエルマッハーの訳であるが、これはドイツ語として読む場合にはなんとも読みづらい。しかし訳としてはきわめて正確であり忠実である。

さて小野さんの訳はどちらかといえば後者のタイプに属するといえよう。評者のように漢文に弱い者が訳本に使うには最適であるが、訳だけとして読むなら少々読みづらい。

中国語と日本語はともに漢字を使うが、同じ字面でもその意味が両国で異なる場合が少くない。したがってそうした語は日本式

の漢語に改めないでそのままにしておかれると面喰ってしまふ。その例をいくつか挙げてみよう。三五ページ「閻・胡西君」は、二百年あまりまえの兩人のことをいつていのだから、そうした表現は日本語として困る。また一一九ページの「諸氏」も同様で、「彼ら」とした方がよい。そのほか二四ページの「遺書」は「遺著」に、一一六ページの「名物」は「品物の名と性質」に、一六七ページの「水道」は「河川」に、二〇二ページの「類書」は「大項目によって分類された事典」に、二二二ページの「名家」は「名士」に、二六三ページの「学者」は「学生」になっていたほうが読者を

とまどわせなくてよかったであろう。また、四五ページの「とりわけ忌憚なきことの最たるものである」、一一七ページの「古人をあざむく」といった漢文口調は、「きわめて軽率で無謀なしわざである」、「古人のいうことをゆがめる」のように砕いてほしかった。

とはいえ小野さんの翻訳は驚嘆すべきほど正確である。こうして本書は、小野さんによる豊富な注と巻末の索引とあいまって、清代を勉強する者のために最上の伴侶となることは確かであるといえよう。

(山下正男)

### 衣川強編『宋元学案・宋元学案補遺・人名字號別名索引』

毎歳何冊かの新しい索引を手にする。

Sinologyと索引がつきものようになったのは決して古いことではない。「学習」即書物を読むこと、そして自らも書物を書き

(B5版、四一六頁、京大人文科学研究所)

残すことであつた旧中国の士大夫たちにとって、「記憶」は何よりも必要条件であつた。今世紀に入るまでは、中国の学者には索引類は面子からでも表向には使える代物

ではなかった。大方の外国人には、中国的教養と知識を葉籠中のものとするなどという芸当は望めぬし、碌な目次すらついでない尨大な書籍を前にして途方に暮れるのが関の山である。まず音をあげたヨーロッパ人は、カネは出すから基本史料だけでも索引を作ってくれといひだし、幾つかのindex引得シリーズが生れた。続いてカネはないが努力一筋の日本の東洋学者たちも次々と索引作りに精を出し始めた。一口に索引といっても人名、地名から引用文献内容、語彙に及ぶまでその性格は多岐であり、實際作る身になると難問が山積し、従って出来上りも玉石混淆となるのはやむを得ない。

私とて新しい索引が出るとすぐ買いこみ、四六時中何がしかの索引を使っている点では人後に落ちない。しかし使いながらいつも宝探しのような興味と、ある焦立たしさと、諦めが入り混った、えも言われぬ思いにとりつかれる。

私が専攻している宋代の制度史や社会経済史の分野は、それに関係ある索引類が多い方である。それでも、例えば語彙索引を引いて満足のゆく答えが出て来る確率は

一割か、せいぜい二割といったところである。だからといって、索引の作られた該当史料にその記事がないかというところ、おおむねそんなことはない。語彙が中心とならざるを得ない索引では、Aに関する重要な記事があっても、Aというコトバがなければ出て来ないことが多い。要するに、索引を作る人の語彙の採録基準と、引く側の立場とのズレが動かしがたく存在するのである。いま一つ、索引をみていると、何となくカサカサした物悲しい感じを避けられない。索引が立派であれば立派な程、そこには索引の持つ宿命を克服せんとした人たちの、残酷物語が秘められている気がするからである。

衣川氏が手首の腱症に悩まされながら作りあげたこの索引は、表題の通り、人名を中心に検索するものだから、一定の基準のたてにくい内容・語彙索引と違い、使う方からすれば極めて便利で安心ということができよう。東洋のルソーこと黄宗羲の原案を、その子黄百家と内弟全祖望がまとめあげた『宋元学案』は、単なる著者のwho's whoにとどまらず、宋元學術史研究の金字塔であるため、戦前から一応の索引はでき

ていた。朱子研究班がスタートしてから『学案』をより有効に使おうという要請が昂まり、改めて王梓材らの編纂した『宋元学案補遺』も加え、五千人を越す、士大夫が本名、アザナ、別號とあらゆる角度から検索できるような形にまとめあげられた。完成まで五年有余、まことに衣川氏の労苦の結晶である。

衣川氏自身は、宋代の士大夫階級の総合的究明を意図され、歴史畑ではこれまで殆んどとりあげられなかった学案を使って新鮮な論文を書いておられる。

「索引作りと研究とは別で、カネと時間があればともかくも索引はできるさ。」

「本当の索引は研究者にしかできない。泡沫のような論文を書くよりも、しっかりした索引を作る方がずっと学界を裨益するものである。」

昔からくり返される二つの意見の間を往たり来たりしている私にとって、両者を結合して邁進せんとする衣川氏は羨しい限り、今後の健闘を期待したい。

(梅原 郁)

## 「昭和初期」ではなく

——一九三〇年前後の政治と社会——

副島 田 照

「昭和初期」ではなく「一九三〇年前後」、かくいえばこのテーマの命名に元号廃止論者である班長の強力なイニシヤティブを想起されるむきもあるかもしれないが、むしろ公的機関の研究会であるからということである。説にあまり固執されなかった班長を批判(?)する班員の中の主張でこのようないささかおちつきのわるいテーマが誕生したのである。公的文書はもちろん、組合の文書をもふくめて日常生活に滲透しているこの元号をいままさら問題にするのは、ものわかりのよすぎる人からみれば少々野暮なことにおもわれるかもしれない。だが日本近現代史における天皇制の意味のおもみに思いをいたす

とき、まさしくその時期を対象とするのが研究班ではこだわらざるをえなかったのである。

じつはこの呼称の問題、元号にかぎったことではない。歴史的事件の呼称についても同様である。二三例をあげれば「万歳事件」、「満州事変」、「支那事変」、また地名についても「満蒙」しかり、「中国本土」しかりである。

これらはいうまでもなく敗戦前、日本帝国主義時代の呼称がそのまま歴史用語としてもちいられているものである。なかにはあらためられたものもあるが、そのままかあるいはカッコつきで用いられているものも多い。この研究班で前に出版した『大正期の急進的自由主義』でもカッコつきの用語を多くもちいたが、しかしそのために文章が煩わしくなるのはいじめない。文章ではカッコをつければいちおうはつきりはするが、話す場合にはいっそうやっかいである。いちいち「いわゆる」をつけるのも耳ざわりである。したがって研究会の席上では互いの了解と気安さからこれらの用語はそのままとびだして行くことも多い。しかし帝国主義的侵略にともない無数につくられた「日本帝国主義語」には、この時期を批判的对象とする以上、これからも気をつかわざるを得ないようである。

研究内容にあまり関係のないことを書きすぎてしまった。この研究会の中心はやはり「満州事変」をめぐる

である。この事件を契機にいわば一鴻千里に日本は軍国主義、ファシズム侵略戦争への道をつつ走っていくのであるが、その原因と過程をこれまでの恐慌下の大勢論、一部将校の陰謀論、あるいは天皇制ファシズム論などをふくめて検討することが課題である。しかし多岐にわたる報告は、このひとつとりの紹介ではもちろんいいづけるものではない。

## 訳注づくり

——漢書の研究——

永田 英正

研究会が発足してはやくも三年目に入った。その間に食貨志、律曆志、溝洫志をいちおう終えて、目下は郊祀志を会読中である。訳稿も量だけはすでに数百枚からに達した。発表したものはまだないが、川勝、橋本の両氏が主として担当した律曆志の一部が近く中央公論社の『世界の名著』に収められて出版の予定であり、これが出ればわれわれ研究班が世に問う漢書口語訳の第一号である。今後もちょうとした機会をみつければ訳稿を発表することも考えているが、しかしわれわれが目ざしているのは、古代史

研究の基礎を固めるために漢書の志部全体についてテキストを校勘し、それにもとづいて可能なかぎりの現代語訳と研究成果をふまえた詳細な注を作成することにある。訳注づくりのむずかしさはいろいろある。漢書でもとくに古代文化をジャンルごとに綜述した志の部分は、むだのない非常に簡潔な文章でつづられており、古代中国人の思维過程をさぐりながら現代語訳をつくるということにしたい、もちろん大変な仕事である。訳文の問題、訳語の問題なども当然それに付随して生じてくる。しかしこれを共同研究として行う場合、同様に大変なのは、内容が内容だけに百出する異見をいかに整理するかということであろう。たとえば郊祀志でさかんに神秘的な方術に出くわすが、実体がわからないために昭和の顔師古たちの異見は活潑であり、かつ奇抜である。中には捨て去るには惜しいものも少くない。訳文に完璧というものがないいじょう、異見は貴重であり、また多くの異見が出るところにこそ共同研究の意義もあるはずである。本所では、そうした異見を十分に反映し、共同研究の成果をいかした訳注として、たとえば肇論研究や元曲の研究など、すぐれた研究を生み出してきた。大変な仕事であるが、漢書の訳注もこうした諸研究に範を求めながら、歴史の分野で一つの見本となるような訳注をつくりあげてみたいと意欲をもちやしている。

### 出 発

——人類学における方法の問題——

野 村 雅 一

新設の民族学博物館の館長として転出した梅棹教授に代わって、この四月に谷助教授を迎えて新しい社会人類学共同研究班が始まった。ふたつの研究会が並行して行われているが、月曜日の「社会と文化の比較人類学的研究」は従来の研究会を、多少若がえらせたかたちで、継承したものである。今年度は東南ア研の高谷、坪内両助教授の参加を得て地理学の方面には一層強くなった。

もうひとつ、「人類学における方法の問題」という研究会を水曜日に開いている。ここでは、その様子を少しご紹介したい。

この新しい班のきわだった特色のひとつは、班員の大部分の関心がわれわれの日常生活に向っていることである。これについては前号で松原氏が触れているが、日常生活の平常の流れをこれまで人類学がまともに取り上げることが少なかった。しかし、当りまえと思われていることをほんとうに理解するのは当りまえでも容易でもないのである。

方法論的には主としてふたつの潮流を認めることができる。

自然人類学出身者を中心とした環境と人間、あるいは人間相互間の関係に焦点を合せた生態人類学的方法。掛谷氏（福井大）と松井氏（京大、在アフリカ）はそれぞれ東アフリカ、沖繩についての調査報告を本年度『季刊人類学』に発表した。

谷、松原両氏をはじめとする言語を通じて文化に迫ろうとする言語人類学的方法。たとえば谷氏はいわゆる成分分析に独特の手法を導入した親族名称や対人関係語の分析を行なっている。また、言語活動が展開する「状況」を研究する者もいる。

ほかに、調査データの数理的処理法の可能性も探られている。

これらの諸方法の提起によって互いに大いに刺激されている。生態人類学でも言語は次第に大きな比重を占めるようになっていくし、逆に言語活動における人間相互の生態学的要因も注目されている。ちなみに、伊谷純一郎氏（理学部）の霊長類のコミュニケーションに関する特別報告もあった。

メンバーの過半数が大学院生という所内でも最も若い研究班のひとつである。報告の多くはまだ多少未熟であるが、極めて意欲的で三年後の成果が大いに期待されるわけである。



# 歴史家ヴェントゥリ教授 を迎えて

松田清

二年前、大著『ロシアポピュリズム』の仏訳を初めて店頭で  
手にとったときの重量感、そのまま立ち読みした序文の熱っぽ  
さは今でもよみがえってくる。貧乏留学生には高価な本であっ  
ただけに一層そうである。ゲルツェン、ガリバルディ、ブラン  
キそしてニーチェとニースゆかりの人間たちはこの青い海の色  
をどんな気持でながめたのだろう、と自問する。しかし、それ  
は三百万とも四百万とも言われるフランスの外国人労働者の生  
活に圧倒されていたときの、束の間の思いでもあった。

京都到着の日、翌日の講演の打合せに会いに行くや、世界中  
の若者が批判精神を失い、ドグマチスムに陥っている、何故か

と問いつめるようにも嘆くようにも語ったヴェントゥリ教授を  
前にして、私は一気に体が熱くなり興奮し、「僕も若いんです」  
と答えただけだった。博士論文の公開審査の当ロドイツ軍が進  
攻し、逃亡と抵抗の生活をした（美術史家の父もイタリアから  
フランスに亡命した）のち、四十五年夏再びソルボンヌに論文  
審査を受けに行ったら、教授先生たちはまるで何ごともなかつ  
たように、何故当日欠席したのかと問うので、極めてソルボン  
ヌに「まことにやんごとなき事情のため」と言い返してやつ  
た、といってユーモアたっぷり権威をこきおろしてくれた。我  
々はタフだから時間の許す限り見学したい、と言い、それを実  
行しつつ、文学部の池田文庫をアタックする六十才の歴史学者  
のエネルギーに私は驚嘆した。講演においても、通訳を無視し  
た形で、メモもノートもなく、何時間でも一気に話したいとい  
う気持がありありと察せられた。南アルプスの山中で二年間パ  
ルチザンとして戦った夫妻（二人はそこで結ばれた、という）  
の話を思いおこせば、彼の講演ぶりはいわば学問のバルチザン  
として生きる姿勢を秘めていたと言える。イタリア統一運動の  
中心であったピエモンテに生まれた彼は、まさにナシヨナリス  
ムをいかに越えるかという問題が現代の我々の課題である、と  
指摘する。また「この点でブルードンのアクチュアリティを問う  
ならばそれは否定的であり、むしろ労働者の自覚性を強調した  
点にこそ積極的意味がある。彼は我々の課題には不十分にしか  
答えていない。いわばイタリアのポピュリストという一面をも  
つガリバルディと、彼が語りかけた農民によって代表されるイ  
タリアのナシヨナリスムを評価していない点では、ブルードン

は時代おくれであった」と展開した。

ピエモンテ人、イタリア人、ヨーロッパ人という三重の生まれを担っている教授の歴史観は、内なるナショナリズムと外なるナショナリズム（スターリン体制下の二年間のモスクワ体験——流刑と弾圧に苦しむ異邦の学者たちとのめぐり合い）を共に越える視点を十八世紀啓蒙主義の批判精神に求め、目的論的歴史哲学に陥ることなく、革命家の系譜学を越えて、あくまで資料の中に生きた人間を読みとっていく態度に貫かれている。

教授夫人の印象を語るには許された紙数を越えるので残念だ。独学のロシア文学者で詩作もするという。そして何よりもかつて優秀なパルチザンであった。

## コムボジション

横山俊夫

昨年来、物理学みたいなことを考えている。まず人と空間の関係。それぞれの生活と空間意識。「体制」はひとつの空間のアイデアを前提にしている。中心と周辺。織れと神聖。移動可能な空間。その速度。人げんという電子の飛び交う様ざまの磁場の体系とでも言えはよい。

そのシステムの中で運動に自足しているかぎり、「体制」

は安定して機能しつづける。この磁場に反作用する位置にたつ、従って構造的には相似のシステムと合体して、ひとつの生態系があると考えてよい。

歴史を、この広義の「体制」の変質過程とみてみる。意外なところで「革命」が展開している。およそ当事者の主観を無視して、こういう空間のチェック・システムに従わない、移動の総体というものに注目してみる。江戸時代のいくつかのそれに関する法令の構造を分析してみる。登場人物は当面、すべて無名無言の存在としておく。かなりの爆発が観察される。ここに生じる電流は、磁場のバランスを変える。江戸後期の余暇・都市化・旅行ブーム。まことに「退屈」こそは、ニッポンの統合とナショナリズムの源流である。「理屈」、言葉と論理の新たな使用は、あとからやってくる。「用」のために、富・力をつかう部分は、己のさかしらにうらぎられて、背景にしりぞく。

つづいて、時間と人。宇宙には、空間を意識するものの数だけの時間が存在する。そのパラエティ。しかし、異質な時・空の触れ合いによる爆発は、別のひとつの世界の創造なくしてはおさまらない。陰陽合して、とはよく言ったものだ。寛政の頃から、さまざまな情報をうけて欧羅巴を想い、そのイメージの中の時空にインヴォルヴされた人びとは、ひとつの爆発する小宇宙であった。彼らのかいたものには、言語体系の個人所有の意識はうすい。ある種のステロ・ファッションが、加速された時間の中にある、彼らの表現様式である。無限にくりかえすサイクルとしての時間が、直線的に進む時間にまきこまれる瞬間。ニッポンの場合、それは、ほんのいくつかの情報の力によって、

もたらされた。ものをものとしてとらえる外にない人びとが、すでにワンサカいた。「退屈」の時代の基調である。ひとつの権威的なイデアの体系が崩れると、ものは、無限の饒舌をもつて登場する。「群村人」にはあたりまえの道具や祠、色・音・リズム。「異国人」にはあたりまえの、正確な航行。堂々たる船と精巧な時計。ディスカバ・アレ・ワンダフル！世界はまた、不思議で充満しはじめる。いにしえと、ゆくすえを、別のへいまにみた人びとの世界が展開する。

さて、このあたりから、たとえば、人と人が交わるときメディア。これも、多様だが、ひとつの時空にひとつのシステムを持つ傾向にある。メディア・テクノロジーの変化は、△体制▽の生態をかえる。たとえば、文政・天保からあと。文字による情報のストックと整理の極端な軽視。人そのものが情報として流れる傾向の強まり。イラストレーションと詩吟。貼紙・おふだ・カワラバン。それから易。古いシンボルや言葉に、新しい情報を満載して弾丸のようにつかう。集団の構成のしかたと、コミュニケーションの構造は不可分である。それは、食糧・配偶者といった基礎情報にかぎらない。

また、このあたりから、死という不可避の情報のうけとめかた。無限と有限。美と醜。価値あるいは権威というもののありかたへと、広げてみる。

人げんのくりひろげるドラマを、インターナショナルな視点でとらえるには、まず時間・空間の問題あたりからすすめる。おお、カミサマーワタクシメがある日はったり宇宙人の美女に会っても、楽しめますように。

## 五代北宋の山水画

曾布川 寛

いま私の机の上に、中国の五代北宋時代の山水画家達の作品、伝荆浩雪景山水図、伝関同秋山晚翠図、范寛谿山行旅図、郭熙早春図の図版が広げられている。前二者は或いは聞き慣れぬかも知れぬが、雪景山水図は米国のネルソン美術館の蔵品で最近日本に紹介され、秋山晚翠図は後二者と同じく台北故宮博物院の蔵品、関同もしくは関同派の作品として私が考えるものである。この時代の山水を語るには、更に李成の名を逸するわけにはいかぬが、伝称作品こそ多かれ、既に米芾によって無李論が唱えられ、「古今第一」、「士流の清放」として伝説的存在と化した彼の山水を窺うに足る作品は存在しない。

一家を成した画家達による各時代の記念碑とも称すべきこれらの諸作を眺めわたすと、最も後期（一〇七〇）に位する郭熙早春図が如何に集大成的であるかがわかる。中央にうねり転折し聳える主山、左右両脇に遠く縹緲たる山々と深く幽邃なる谿谷を布置して、各々高遠、平遠、深遠を使い分け、一図に諸様式を融合して、彼の山水理論「林泉高致」に劣らぬ集大成的完成度を示している。しかしここに至る長い道程は必ずしも明瞭



でない。五代北宋の遺品数の僅少という事情により、范寛の艸山行旅図をおけば、画家の名を冠した確証ある作品は殆んど稀だからである。雪景山水図、秋山晚翠図の作者名の上に更に「伝」を冠した所以である。けれども秋山晚翠図についていえば、他の伝関同画をさしおき、関同もしくは関同派の作品として肯て取り上げたのは、北宋の諸文献、『図画見聞誌』『画品』『宣和画譜』等の記事に合致するばかりか、作品分析によって、五代後梁の関同にふさわしい画格と年代を有し、関同派の作品、例えば郭忠恕の鵝川図巻と類似様式をもっているからである。この晚翠図から艸山行旅図を経て早春図までが、五代北宋山水

画のたどったごく大ざっぱな道であるが、劈頭の晚翠図は、北宋山水画の傾斜していった方向を映し出すと同時に、更に唐画としての多分な性格が闊につつまれた晚唐山水画様式への展望を与えてくれる。盤踞した蛟龍を彷彿させる樹木、山というより石による集積構成は、中、晩唐に盛行した松石画と松石山水画を推測させる。また山石における氣勢の連絡表現も、晩唐に流行したという風水論の山水画への影響、そして唐末五代の伝荆浩雪景山水図解釈への重要な手がかりを提供する。五代北宋山水画が唐画の遺産の上に築かれたことが改めて思い起されるのである。

## 東洋学文献センター

### 昭和四十八年度

#### 漢籍担当者講習会

野和子、愛宕元、小南一郎、今井清、東京大 第三日  
 学東洋文化研究所の田中一成、池田温、陳明 写本書誌学 藤 枝 晃  
 新、沢谷昭次の諸氏が当った。また第三日に 仏典概説 牧 田 諦 亮  
 は大谷大学図書館を見学し、仏教関係の蔵書 第四日  
 について高橋正隆館長より解説していただいた 子部書 日 原 利 国  
 た。 和刻本について 長 沢 規 矩 也

文部省学術局情報図書館課と本所附属東洋

#### 第一日

学文献センターとの共催による全国ライブラ

開会にあたって 林 屋 辰 三 郎

漢籍目録について 倉 田 淳 之 助

東洋学文献センターの役割

リアンのための漢籍講習会は、本年も五月二

#### 第二日

十七日から六日間、京大農学部大講義室を主

会場として行われた。受講者は三十名、日程 経部書 平 岡 武 夫

集部書・叢書 日 比 野 丈 夫  
 市 原 亨 吉

は下記の通りである。なお実習指導員として

#### 第三日

講師のほかに、本所の荒井健、吉川忠夫、小

#### 第六日

参考図書解説 永 田 英 正

講師のほかに、本所の荒井健、吉川忠夫、小

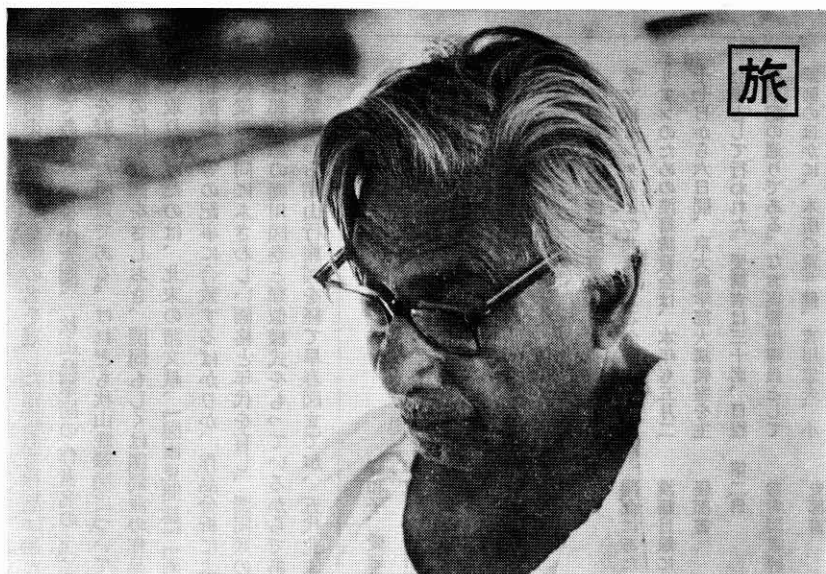
#### 史部書

梅 原 郁

討議及び情報交換

(司会) 日 比 野 丈 夫

# 旅



## ジャイ・ヒン・サーブ

横山 俊夫

シート・金具・窓ガラス、ありとある部分が、きしみにきしんで、世界最悪とは、だれが言っていたのか。私のほかは平然たる顔つきの砂化粧のお客にまぎれて、私もまけずおとらず口の中までジャリジャリで、頭のシンにワーンと別の幻聴を感じながら、地図に小さくしるされたシブプリーなる町に、ようやく入ったのは、すでにはこりっぽい夕方、ランプとピーナツを炒る火に、木炭のこげる、パコラを揚げる、夕餉のけむりがからみあい、黄褐色のもやとなつてたちこめていた。グワリオル・モラールの村人は、あるいは一時間、あるいは五時間かかると、どちらも親切からの予測であった。結局は、道をよぎる放牧の牛・ヤギが所要時間を決めてくれた。

まだ荒く息づいているバスの屋根によじて荷をおろした私のまわりに、「カハンセ？カハンセ？」と人々がどこから来た人種かといふかつて輪をつくっている。少年の御すやせたポニーのタンガが、私をのせてぼつんと町のはずれに立った時、はや冷えびえとした風が、冬枯れのサバンナをわたってきて、それから先は、かたい砂の間道を、五里砂中。降るような星にしらむ空が、南北

を知らせるものの、私は、目的が北にあるのか、南かを知らなかった。時どき、遠からぬ先に、ボウと火があがるのは、何をしているのか、男たちの低い声。つまりは「道」ばたで人をまつのか。十八世紀末以来、マラータの末裔が、「ダコイト」すなわち盗賊とよばれるものになって、自らの歴史の誇りを、大英帝国に入れかわった会議派政府にも、示しつつけたのは、このあたり一帯。そして、つい昨年「降伏」までのことであった。

ようやく耳慣れたタンガの鈴の音にあやされて、ウトウトするころ、「ドウ・ミル」と少年が、前方に灯を指す。「あと二マイル？ 朝までかかっていいよ。」

「ジャイヒーン」「おはようさんジャイヒーン。あそこで逆立ちしてるヘンなだけですかい？ サープ」「ゆうべ、日本から帰ってきた息子さ」「？」

早朝、畑仕事、山仕事の村人が通りかかる。彼らどうしの挨拶は「ジャラム・ジキ」「ジャイ・ジャラム」である。十世紀ころのヒンズー寺院の遺跡に、自分たちの伝承を強引にむすびつけている人びと。

「ジャイヒーン・サーシェリアカル」今この荒れたサバンナを、これら「土地の人びと」をやとって開墾しているのは、分離独立の時の流血をのがれて、アムリツァル以东へ、さらにゆえあって中央インドまでやって来た、シークたちである。村でカレンダーを持っている連中だ。近くに出来た政府農場のお役人もやって来た。彼のところの小麦は、今年は実が入っていない。近く牧羊専門の村に、タダでくれてやるとのこと。「ジャイヒーン・ナマステ。わたしところは、ジッケン畑ですからナ。」「トシ、わかる

か？ みんなわしにはジャイ・ヒンだよ。」そういえば、町に行きたとき、ムスリム達も「アッサラム・アレクム」とは言わなかった。この村の人々が、「豊かではないが、貧しくもない」くらしをはじめたのは、ほんの二、三年前という。複雑な人種構成と、度しがたい慣習の相違をこえて、「ジャイ・ヒーン・サープ」と親しまれるこの人は、一つの理想をにかけて、シブプリー一円の間模様をかえてきた。

G・S・デIRON。六十三才。I・N・A・旧インド国民軍大佐。英軍にもっとも恐れられたゲリラの領袖。四十六年、レッドフォート軍事法廷の三被告の一人。「I・N・A・の兵士こそは、バガット・シン、ジャンシの女王以来の独立殉難者である。」「ネルー？ ヒンドスタンのために命を賭した我われが、法廷にひきたてられるのを待っておったのだ。雄弁をふるおうとナ。」たしか、ネルー没後、彼を称える政府刊行物が出おくれたのには、執筆分担者のディロン氏の抵抗もからんでいる。「非暴力？」「とんでもない。パーティションのときのベンガルをみよ。パンジャブをみよ。」彼との少々不思議な初対面は七十二年一月、カルカッタであった。

I・N・A・スピリットなるものを、村中に説く。学校をつくり、自作のダンスを村人におしえ、詩を吟ずる。そして、軍の合言葉「ジャイ・ヒン（インド万歳）」の挨拶は子供達もすっかりなじみだ。

戦勝国側の歴史観をおしつけられて、かなしいのは、「悪玉方のカイライ」という烙印をおされた人々であろう。独立後、彼はボースのフォワード・ブロックの系譜をひく左派であった。総選

拳にも出た。自転車で村中を廻る。結果、グワリオルのマハラジャの勝利。「しよせん政治は、金持のダーティ・ゲームさ。」

今、近くの山に隠栖する「ほら穴」つくりに余念がない。I・N・A・の史料と精神を若い世代に伝える小さな展示室をつける予定だ。

モンスーンの先ぶれの暖風がふきだすと、麦の穂はいっせいに色づきはじめる。「いかん、いかん／ かえってはいかん／」「むしろにこんなに愛させておいて／」村人から、バブジーとよばれる九十翁は、はりがねのような手で杖をふりあげた。いつもの、かきませたような灰色の腫が、いっそうぐしゃぐしゃになっている。「いつかえってくる?」「おそらくとも三年さき? それまで生きてるヨ。」

帰国の当座、人類学の談話会や、市民文化研究会で、異質な集団の文化交流のありかたや、カースト制度とよばれるものの実態について、いくつかのアイデアを述べてみた。半年もたてば、みてきたことよりも、みられなかったことの方に関心がうつっている。村むらからはるか孤立してくらす、誇り高く貧しいラジャスタンの王族の男。一年半ほど前にやってくる、ドライ・ファミリーミッドグを始めたジプシーたち。グワリオルで「職業訓練中」とやらの「ダコイト」の頭目たち。村の盲目のミュージシャンや魅力的な井戸掘の親方。私は彼らのことをどれだけ知ったのだろうか。それに、こんど出かけるときは、シークの密造酒タラの秘法と、タブラの古風なビート法でもマスターしたいと思っている。

## イタリアの二週間

谷 泰

六月八日から、ミラノのボッコニ大学、東アジア経済社会研究所主催の日本についてのシンポジウムの出席と、以前から調査してきたイタリア中部山村の追調査をかねて、イタリアに二週間滞在した。

ボッコニ大学といっても、日本ではほとんど知られてないが、一橋大学に対比される地位を占める、イタリアの数少ない私立大学の一つである。そこに昨年、東アジア経済社会研究所というものが設立された。イタリアは日本学という点では、英、独、仏に比べれば研究者の層は厚くない。しかし戦後日本に留学した若手研究者の中には、実力をたくわえた研究者が数多くはないが育てられた。その若手研究者の熱意がかなえられて、この研究所が発足したのである。従来、文学や芸術、宗教といった分野に関心の偏った日本理解の態度から、社会科学のアプローチをも進めるようになったヨーロッパの日本研究者が正面きって、それを表看板に立てたものの一つとして評価されるものだろう。

シンポジウムのテーマは、「日本における一九八〇年までの経済動態と社会構造」というものであった。参加を依頼されたとき

は、短期的将来見通しを含むことが求められているようで、わたしなどベシシク社会・文化の特徴を問題にしているものには無縁のものに思えた。ところが日本社会のより基本的特質といった問題提起も討議の対象に含まれるので参加してほしいという。それならということで国際交流基金の援助をうけて、出席した訳である。

会議は二日間、出席者は五十余名。日本、イタリアはもちろん、英独仏、スイス、オーストリア、アメリカ各国から、社会学、人類学、政治学、歴史学、経済学の各分野で日本を研究している人びとが集った。ロナルド・P・ドアー、フォスコ・マラーニ、尾上久雄、I・ガスパリーニなどが交代に議長をつとめ、発表のあとに十分の質疑応答の時間がとられていた。朝九時から夕刻七時すぎまで、昼食事の休憩を除くと、発表とディスカッションの連続で、イタリア人の急げ者という評価をおよそ裏切るハード・スケジュールで、アメリカの学者も舌をまいてた。それでも小規模な集りで、賓客である外国人への接待もゆきとどいて、あの味気ないメガロマニアックな大国際学会では味わえぬ人間的な触れ合いに、出席者は満足した。

シンポジウムが終って、はじめてゆっくり新聞をみると、イタリアの内閣は崩壊して、新しい閣僚づくりの最中で空白状態だという。それでも、政府は機能まひした中で、大混乱もなく、インフレの中とはいえ市民生活は日本より安定して、相変らず人びとが生活をたのしんでいるのがイタリアらしい。こんな風に思って、アブルッツォの山村に出かけた。村人は相変らず親切で、そのもち前の気前の良さで、ついこの間、別れた友のような気で迎えて

くれた。

その後、帰国前にわたしはミラノの友人たちに礼と別れをかねて訪ねようと思ってミラノにもどった。出発前日の帰国便のリザーヴもすませた。ミラノでも、田舎のアブルッツォでも十分暖かくもてなされたわたしは、こんどの旅も、不快な思いもなく終えることができたと思った。明日は朝の国内便でローマにゆき、乗りついで羽田行きの国際便にのればよい。ゆっくりした気分で夕食後、テレヴィのスイッチをひねった。ニュースの時間だった。組閣はまだ難行している。いつものことだ。こう思っていたとき、傍にいた友人が突然「おい明日のアリタリアは全面ストだぞ」と叫んだ。テレヴィをつけなければ、ストとも知らず空港にゆき、ミラノで足どめをくわされて、公用出張の日までに帰れなかったことになる所であった。わたしはあわてて荷をつくり、ミラノの駅に走った。ようやく間に合った最終夜行列車は満員だった。坐れぬまま夜をすごしたわたしは、かすみのかかった頭で、翌朝ローマ駅に降り立った。「シニョーレ・バガツリ」赤幄が愛想をふりまわして近づいてくる。気持よい滞在の最後の瞬間にどんでん返しをくわされて、怒っていた。イタリア人の急げ者、つけんどんにわたしは赤幄の申出を断ってしまった。もちろん、この赤幄には罪はない。いらいらしながら重い荷物を自分でもって歩き出した。プラットフォームはいやに長かった。腕がぬけそうになって荷物をおろして一息入れたとき、イタリアの紳士が、さきの赤幄に荷物を引かせて、すいすいとわたしを追いこして行ってしまった。くだらぬことであわてたり、怒ったりすると馬鹿をみる。とくにイタリアではあわててはいけない。

## 韓国古建築瞥見の旅

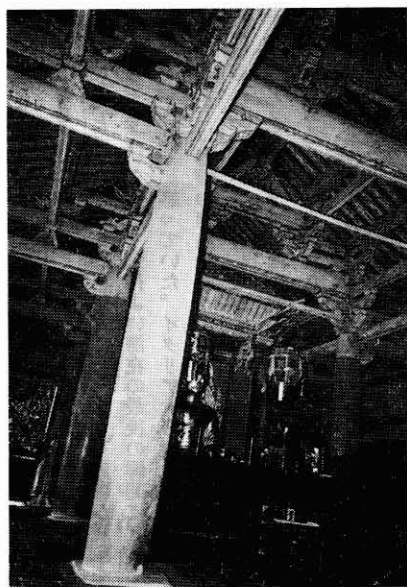
田 中 淡

建築学会の研修団に参加して韓国の主要木造建築を中心に見学してきました。出発直前に朴正熙狙撃劇があったため、やや不穏な状況で、そのため用心深い数人の研究者は参加をとりやめたりしたのですが、ソウル市内で慎重な行動をとるような注意が必要とされたほかは、ほぼ予定の見学を消化することができました。

しかし日本人の評判はとくに都市部壮年以下の層において芳しくなく、市の買物の途中にも「日本人」というような、かなり非難を伴った台詞をいただきました。観光都市慶州に入ると、食堂の妓生をはじめ露骨に日本語が通じるようになったのにはビックリ。有名なノーキョーの先生方をはじめ、ひたすら銭のみのご活躍ぶりは想像以上で、あまり書きたくないけれど、ひどく冷え切った実感です。

行程の半ば江陵をへて榮州、安東の地方都市に至るころがハード・スケージュールのピークであったのと、韓式旅館の硬い油紙の床と韓式料理の連続によって、参加者のうちかなりの人が消化器系統に異常をきたしたようです。

これは今おもうと韓式の食事そのものではなくて、むしろ食堂



に共通する、赤トウガラシ・ニンニク・魚糠漬・味噌などの混ったような独特の臭いによって、こちらが精神的に消耗してしまつたためという感じ です。

ところで韓国の木造建築は日本に比べると古いものが少いのですが、それでも高麗末・十四世紀以前に入る代表的な三棟——鳳停寺極楽殿・浮石寺無量寿殿・修徳寺大雄殿——を筆頭に、質的にはかなりハイレベルのものがのこっています。この中でも庄卷は浮石寺の無量寿殿で（写真）、建築様式・技法の系統からいうと、北宋の円熟期に至る以前の中国建築との交流の形跡をとどめた朝鮮独自の伝統様式である柱心包（日本の和様に相当する）を伝えるもので、同じように中国との交流によって発展した日本建築の場合と比べると、その受容形態がかなり異質であることにとくに

興味をひかれます。この建築はそれにもまして内部空間の構築がみごとで、デザイン上の巧思に圧倒される感じですが。それからこの建物では本尊の向きが桁行（長平方向）になっていて、建物自体の向きと本尊の向きがちがうのです。朝鮮建築の場合、建築の向き、本尊の向き、伽藍全体の向きがそれぞれ巧みに構成されているといえます。いわば「空間の志向性」という要素が無視できないのですが、こういうことは日本建築では殆んど経験できないので、本来、基本的な要素ではあっても気がつかずにいてしまったります。

ソウル南大門はロータリーの真ん中にあるので、情勢不穩の折から大がかりな見学は控えることになり、中には入れませんでした。

## お客さま

アンリ・ミッシェル氏

「第二次大戦史国際委員会」の会長。フランス国内委員会事務局長であると同時にフランス国立科学院の現代史部門の主任研究員を兼ねている。フランス政府の派遣で四月一四日、来日。四月二三日、本所を訪れ、午後二時から尊攘堂で「第二次大戦末のフランス」について講演と討論の機会をもった。つづいて楽友会館で総長招待のパーティがあり、日仏会館長も加わって歓談した。参会者約二〇名。

## この一年間に感銘をうけた本

——所員へのアンケート——

（五十首順）

- |       |   |       |
|-------|---|-------|
| ・荒井 健 | G・S・ルイス著、瀬田貞二訳<br>『ナルニア国物語』   | 岩波書店  |
| ・飯沼二郎 | T・K生『韓国からの通信』   | 岩波新書  |
| ・上山春平 | 三品彰英『古代祭礼と穀霊信仰』<br>(三品彰英論文集、第五卷)                                    | 平凡社   |
| ・内井惣七 | J. Rawls, <i>A Theory of Justice</i><br>(Harvard Univ. Press, 1971) | 新潮社   |
| ・樺山紘一 | 滝井孝作『俳人仲間』  | 新潮社   |
| ・河野健二 | Pierre Ansart, <i>Naissance de l'anarchisme</i> , 1970, PUF.        | 岩波書店  |
| ・小南一郎 | 矢吹慶輝『三階教之研究』  | 岩波新書  |
| ・副島円照 | T・K生『韓国からの通信』   | 光文社   |
| ・野村雅一 | 竹内実『毛沢東の生涯』   | 平楽寺書店 |
| ・牧田諦亮 | 山口益編『仏教聖典』  | みすず書房 |
| ・山田慶児 | ハイゼンベルク著、山崎和夫訳<br>『部分と全体』   | 筑摩書房  |
| ・吉川忠夫 | 入矢義高訳注『龐居士語録』<br>(禪の語録、第七卷)   | 筑摩書房  |

## 書いたもの一覧

一九七四年三月～八月  
(五十音順、●印は単行本)



### ・飛鳥井雅道

思想史研究における分析的方法  
書評・大仏次郎『冬の花』 思想 四月  
朝日ジャーナル 四月  
ある政治小説作者の晩年(近代日本文学大系 2巻、月報)  
角川書店 四月

### ・飯沼二郎

日本における近代農学の成立——林遠里と横井時敬——  
人文学報 三七号 二月  
月刊エコノミスト 三月号  
国際分業論 農業協同組合 三月号  
日本農法まさに滅びんとす 自然 三月号  
世界食糧危機と「緑の革命」  
クリスチャニゼーションとヒューマニゼーション  
——池先生のお話への一つのコメント—— 共助 四月号  
大江健三郎論(日本文学研究資料叢書『安部公房、  
大江健三郎』) 有精堂 五月  
祈りの生活を確立しよう(座談会、金元治、高  
杉三四子、種谷俊一) 信徒の友 六月号

### 書評・北沢恒彦『方法としての現場』

朝日ジャーナル 六月七日  
書評・エリクソン著、星野美賀子訳『ガンディ  
ーの真理』 エコノミスト 六月一日

### ●編『沢崎堅造の信仰と生涯』

食糧危機論と農民の立場

国際分業論の行方

農業にとって合理化とは何か

イエスのことば(1)——(6)

熊本日日新聞 七月二五日、八月一日、八月八日、一五日、二二日、二九日

国家権力による教育支配の方向

望星 八月号

日本型「合理的農業」とは何か 販売革新 一二巻一〇号 八月

国家主権と人権——金大中事件一年—— 読売新聞 八月八日

世界の食糧危機と農業の革命 マイファミリー 二四号 八月

わたしの朝鮮研究 統一評論 八月号

### ・上山春平

●仏教の思想(共編) 中央公論社 六月



・内井 惣七

賭・確率・帰納法

人文学報 三十七号 二月

Moral Reasoning.

Zinbun, No. 13. 四月

因果必然性と主観的必然性——新ヒューム主義試論

科学哲学 六号 (日本科学哲学会編) 五月

Review of A. A. Zinovev, *Foundations of the*

*Logical Theory of Scientific Knowledge (Complex*

*Logic). Philosophia (Philosophical Quarterly of*

*Israel), Vol. 4, No. 3.*

Inductive Logic with causal Modalities : A Deter-

ministic Approach (Abstract). *The Philosopher's*

*Index, Vol. 8, No. 1.*

・梅 原 郁

五代・宋・元 (『日本に於ける歴史学の発達と現状』)

東大出版会 三月

・樺 山 紘 一

西欧キリスト教と異端、自由心霊派異端について (会田、中

村編『異端運動の研究』) 人文科学研究所 三月

書評・石毛直道編『世界の食事文化』

季刊人類学 五卷二号 五月

書評・藤田省三『現代史断章』

歴史と人物 七月号

・川 勝 義 雄

中国前期の異端運動——道教系反体制運動を中心に——(『異

端運動の研究』)

人文科学研究所 三月

●魏晉南北朝(『中国の歴史』三卷)

講談社 八月

・河 野 健 二

西欧の混迷と国際政治(座談会)

エコノミスト 五二卷二〇号 五月

書評・ローザク編『何のための学問』

朝日ジャーナル 一六卷二〇号 五月

中国の「世界認識」

アジア 九卷六号 六月

口中友好のありかた

日中文化交流 七月号

新しい社会主義を考える(座談会)

潮 一八一号 七月

●もう一つの社会主義

現代総研シリーズ 三号 七月

●現代の認識

朝日新聞社 八月

社会科学の精密な探求に向かって

朝日ジャーナル 一六卷三二号 八月

戦後三〇年(対談・この人と)

毎日新聞 八月二三日～二九日

東風西風

読売新聞 七月五日～八月三〇日

・熊 倉 功 夫

芸道聞書の系譜(共同執筆)

茶湯・研究と資料 七号 三月

煎茶初期史料について

茶湯・研究と資料 七号 三月

●茶道四祖伝書(校訂)

思文閣 四月

数寄の系譜

淡交 二八卷四号 四月

文明開化(『京都の歴史』七卷)

三月

茶寄合の発達・流通経済の発展・茶業の発展と茶師

『宇治市史』二巻)

・桑山正進

タキシラ仏寺の伽藍構成

・小南一郎

西王母と七夕伝承

世界美術小辞典——中国考古——

・曾布川寛

『近百年中国絵画』作家解説

・竹内実

孫文・滔天・安東省庵(細道の中国一二) 伝統と現代 三月号

・批林・批孔のなかの肉声

「批林批孔」への考察

中国における歴史的人物の再評価

中国英傑たちの再評価のされ方(対談)

中国展に見る現代中国

新段階の批林批孔

◎茶館・中国の風土と世界像

・多田道太郎

The Glory and the Misery of "My Home". —"Japan

Interpreter" Vol. 9. Spring 1974.

日常生活(『日本人の美意識』所収)

◎人と人との間(共著)

・谷泰

十二・三世紀北イタリア都市における教区現実(会田・中村

編『異端運動の研究』)

人文科学研究所 三月

呼称研究の視野(梅棹編『人類学のすすめ』筑摩書房

日本語における親族名称の構造分析

季刊人類学 五月

・永田英正

碑刻解説(『中華人民共和国河南省碑刻画像石』)

居延漢簡の集成——破城子(ム・ドルベルジン)出土の定

期文書—— 東方学報 四月 三月

・野村雅一

書評・長璋吉『私の朝鮮語小辞典』季刊人類学 五月

書評・岩田慶治『草木虫魚の人類学』

季刊人類学 五月 三月

世界の子供たち・イタリア

・林巳奈夫

漢代の鬼神の世界

長沙馬王堆一号墓副葬の食物

・林屋辰三郎

消息数寄——千利休

『宇治市史』第七巻「維新の激動」序説

『京都の歴史』第二巻序説

●『近世伝統文化論』

洛西の浄土—上品蓮台寺をめぐる

清風会報 三二号 七月

●『風と流れと』(共編)

朝日新聞社 八月

●『日本文化の東と西』

講談社 八月

語りの流れ 一—三

子どもの館 七—九月

消息数寄二—古田織部

茶湯 七号 九月

樋口 謹一

書評・竹原良文編『フランス革命と近代政治思想の転回』

日本読書新聞 五月—三十一号

情報文明史観—仮説史学の提唱—(講座『情報社会科学』

一七卷)

学習研究社 六月

フランス大統領選と野党共闘の論理(座談会・前川嘉一、

渡部徹、板東慧)

労働調査時報 六月

お中元の季節・選挙の季節

朝日新聞 七月九日

・日比野 丈夫

河南省の碑刻について(『中華人民共和国河南省碑刻画

像石』)

共同通信社 二月

●華僑 改訂版(共著、NHKブックス)

日本放送出版協会 二月

竹筒孫子発見の意味するもの

信濃毎日新聞 五月

東南アジアにおける漢文碑刻

(南方文化 創刊号)

天理南方文化研究会 六月

ジャカルタの牛郎沙里義塚碑について

同右

中国風土記(『世界の国』一巻、中国)

講談社 六月

楊守敬の水経注研究(『訳注隣蘇老人書論集』上、別報)

省心書房 七月

・福 永 光 司

中国を旅行して

中国語 一七〇号 三月

神道と道教

京都新聞 四月三日

価値の相対化

考える読書 一九号

毎日新聞社 四月

仏教の遺産(座談会)

中央公論 五月号

現代中国における文化財保護

文化財報 一号 五月

老荘思想と日本人(講談社『中国の歴史』一巻、月報)

六月

中江藤樹と神道(岩波書店『日本思想大系』二九巻、月報)

七月

「茶道文化研究」の題字について 茶道文化研究 一輯

八月

馬王堆漢墓の帛書

朝日新聞 八月二三日

・藤 枝 晃

閩廬堂狂言

三洋化成ニュース 二四三号 四月

北野界限

同 二四四号 五月

堀河古義堂

同 二四五号 六月

『文字の文化史』に至るまで(「アジア学の系譜」二、

対談・矢野暢)

●江左窟印存後集(編・跋)

アジア 九巻七号 七月

前川 和也

京都同風印社 八月

Agricultural Production in Ancient Sumner.

同

## ・牧田 諦 亮

◎弘明集研究、卷中(訳注篇 上) 人文科学研究所 三月

◎塚本善隆著作集 六卷(編集、解題) 大東出版社 四月

観音信仰の起源(浅草寺仏教文化講座 一八卷) 浅草寺 八月

中国仏教史の流れ(一、二)

アジア文化 一〇巻四号 一一巻一号 三月、六月

## ・松原 正 毅

現代人類学の課題(梅棹忠夫編『人類学のすすめ』)

筑摩書房 四月

南西アナリア農村の住居

都市住宅 五月号

密林——のこされた探検のフィールド——(共著)(磯貝浩編)

『素晴らしき地球——冒険の記録——』 山と溪谷社 六月

文化諸要素の移入とその国内伝播——椅子、キセル・パイプ

クツ、竹、ネコ、箸 エナジー 一一巻一号 八月

## ・山下 正 男

アメリカの異端——ヨーロッパとの比較において——(会田

・中村編『異端運動の研究』 人文科学研究所 三月

著者から読者へ——わたしの書きたかったこと——(動物と

西欧思想』について) 読書グループ 四月一五月号

数学と哲学における生成の概念 現代数学 六月号

## ・山 田 慶 児

医学における伝統からの創造 展望 五月号

◎東と西の学者と工匠 上(共訳) 河出書房 七月

中国の工業化とその構造(鶴見和子・市井三郎編『思想の冒

険』) 筑摩書房 八月

## ・吉川 忠 夫

◎侯景の乱始末記 中央公論社 四月

一九七三年の歴史学界——回顧と展望——魏晉南北朝

史学雑誌 五月号

## ・吉田 光 邦

中国・日本における正統と異端(『異端運動の研究』)

運動態としての異端 同右

塗るということ(『鈴木表朗作品集』) 流動 三月

終末論の批判 流動 三月

現代の文化状況と行政(『大阪文化を考える』)

琳派の表現(『琳派百図』) 三月

さくらさくら 婦人友 四月

◎日本庶民文化史料集成『遊び』(共著) 三一書房 五月

書評・『中国文明の形成』 科学朝日 六月

天象・信仰・呪術(『日本の文様』) 六月

人間と色彩(『世界のグラフィックデザイン』) 時事通信社 六月

◎京都の記録・夏つくる 六月

恒久と変化の対応(『現代版画星座シリーズ』解説) 六月

京都産業と国際化(『古都の異国』) 六月

宇野宗鑒 図版解説(宇野真理栄と其著)

清水焼(『パロリス・国際ビエンナーレ図録』)

佐賀錦

ベルシア・カーペット小史(二)

オカルトの意味

まず楽しい読書の旅を

中国展によせる

近代と京焼

日本人起源論の再発掘

日本妖怪の系譜(『妖怪の本』)

旅の変質

東欧の中国陶磁(『小林太市郎著作集』月報)

伝統産業ということ

書評・『近代日本の技術と思想』

工芸史雑筆

伝統と現代

●いろ

大航海時代の世界像

手仕事の意義

・渡 部 微

●部

部落問題・水平運動資料集成

共産主義運動とは何であったのか

朝日ジャーナル

五月七日

二一書房

三、六月

五月七日

五月七日

五月七日

## 人のうごき

井上忠司助手(日本部)は辞任の上、甲南大学助教授として転出。(四十八年九月三〇日付)

秋山元秀氏を助手(東方面部)に採用。(四十八年十二月一日付)

松田清・見市雅俊両氏を助手(西洋部)に採用。(四十九年三月一日付)

橋本敬造助手(東方面部)は辞任の上、関西大学社会学部助教授として転出。

狭間直樹助手(東方面部)は辞任の上、仏教大学文学部助教授として転出。

三宅一郎講師(日本部)は辞任の上、同志社大学法学部教授として転出。(以上四十九年三月三十一日付)

吉川忠夫教養部助教授は当研究所助教授(東方面部)に配置換。

牧田諦亮助教授(東方面部)は教授に昇任。

小野和子・田中重雄両助手(東方面部)は講師に昇任。

福永光司教授(東方面部)は、東京大学文学部教授に配置換、当研究所に教授として併任。

谷泰氏を助教授(西洋部)に採用。

## 編集後記

。森時彦を助手（東方部）に採用。

。田中淡氏（文化庁文化財保護部建造物課文部投官）は当研究所助手（東方部）に転任。

。園田英弘氏を助手（日本部）に採用。

。所長河野健二教授は四十九年三月三十一日任期満了。

。林屋辰三郎教授が新所長に就任。附属東洋学文献センター長に併任。（以上四十九年四月一日付）

。島田虔次教授は、四十八年十一月二十八日羽田発、テキサス・パリ大学等で中国思想史および近世史に関する研究を終え、十二月二十八日帰国。

。桑山正進助手は、四十八年十二月九日羽田発、デリー・アグラ・サルナート・カトマンズ等で仏教遺跡調査を終え、十二月十九日帰国。

。横山俊夫助手は、四十九年一月二十八日伊丹発、タマサート・デリー大学、デイロン農場等で民族主義に関する研究調査を終え、三月二十一日帰国。

。熊倉功夫助手は、四十九年三月十八日羽田発、ハーバード大学、パリ大学、ミュンヘン大学等で日本研究についての調査研究及び資料蒐集中、五〇年三月十二日帰国予定。

『人文』も十一号になった。久しぶりに全十号を読みかえしてみて、所員の相互批判・相互啓蒙を目的としているにしておきながら、（もちろん、編集委員の）不足していることを痛感した。共同研究が人文の表看板だとしたら、「共同研究のうごき」など、今のスペースの二、三倍にしてもいいのではないかな。なお、次号は、人文の建物についての特集を企画している。

（飯沼二郎）

「所報」もこんどで十二号。予想を上廻る長命ぶりであり、その内容もなかなかのもの。これは白画自讃ではなく、創刊から第十号までの編集の主軸となつてこられた藤枝委員の御健闘への讃辞であり、こんどの号の主軸となつていただいた飯沼委員への謝辞のつもりでございます。藤枝さんが委員を去られると、大きな穴ボコができるのではないかとという危惧は、飯沼・梅原両委員の仕事ぶりをボカンと横から拝見していて、杞憂にすぎないことを確信いたしました。

（上山春平）

凄く牽引力の機関車と優れた運転士、私は安心してカマをたいておればよい。ところで山来カマときは六ヶ敷いもの。才能豊かすぎる前任者が名人芸の継承を要求するからなおさらである。そこは東方部らしく「祖宗の成法に循う」のだが、このたびは車掌も兼ねて乗車制限をしたり、お客にクレームをつける余裕なく、かくて少年期に入った「人文」――一号は御覧の通り。

（梅原 郁）

人

文

第二号

昭和四九年三月二十五日

京都大学人文科学研究所 発行

明文舎印刷

非売品